



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報 第4号

編集・発行：東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2006年3月1日

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会・郵便振替口座番号：02220-5-66621

会長挨拶

浅川 照夫

(研究科長・言語システム論講座教授)



国際文化研究科は平成5年に国際地域文化論と国際文化交流論の二専攻で設立され、平成13年に国際文化言語論専攻が加わり、現在の構成になっています。翌平成14年には研究科創立10周年を迎え、その節目の年の

11月に国際文化研究科同窓会が設立されました。同窓会設立に当たっては、準備段階から設立総会に至るまで、母体である国際文化研究科の教職員および学生の皆様に大変お世話になっています。誕生してから僅か3年です。一人前の alumni and alumnae association となるためには、会員数もさることながら、同窓生である私たちが親睦をより深めていくことが大切です。

同窓会を育むものは、過去を懐かしみ、未来を支える心だと思います。社会に出た方々には、ゼミの予習や発表会の原稿作成に追われた悪夢、読書会での楽しい議論、修士論文と博士論文完成時の満足感、院生室の雑多さ、キャンパスの季節のにおいなど、昔を振り返る材料は数え切れませんが、そこに友達の顔、教師の顔を加えてください。楽しい思いは言うに及ばず、つらい思いすら、すべてが懐かしいものに変容するでしょう。現役の学生であれば、未来から今を想像的に眺めてください。そして、充実した修士・博士課程の時代であったと胸を張れるよう今を励んでください。その頑張りが国際文化研究科の質を高め、社会人となられた同窓生の誇りとなり、国際文化研究科同窓会の未来を支えていく力になると信じます。

国際文化研究科そのものもまだまだ若々しい研究科で、その沿革を辿るほど年齢を重ねてはいません。同窓生の皆様の中には「国際文化って、何をやっているのですか」と問われて、返答に窮した方がいらっしゃるかもしれません。

残念な事に、「国際文化」の概念が曖昧なまま、10数年が過ぎてしまいました。この間、日本国際文化学会も発足し、「国際文化学」の概念構築に向けて議論が続けられています。しかし、学問分野がますます個別化、先鋭化していく中で、総合的な学問領域を擁立することは口で言うほど簡単ではありません。アイデンティティ確立のためにも、私たち全員が努力していかなければならないと思います。

第5回同窓会総会と講演会のご案内

第5回同窓会総会と同窓生による講演会を次の通り開催します。講演会に引き続き、国際文化研究科との共催により平成17年度修了祝賀会が開催されますので奮ってご参加ください。

お誘いあわせて
多数ご来聴ください！

日時：2006年3月24日（金）15：00～

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：山田 恵氏

(仙台白百合女子大学助手・アメリカ研究講座出身)

演題：「国際文化研究科と私」（仮題）

第4回同窓会総会と講演会のご報告

第4回同窓会総会を2005年3月25日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにおいて開催しました。総会に引き続き、後藤致人氏（愛知学院大学助教授・アジア社会論講座出身）による講演会を開催しました。

(次の要旨をご覧ください)

＜講演要旨＞ 「短大教育と国際文化」

後藤 致人

（愛知学院大学文学部助教授・アジア社会論講座出身）

私は、東北大学大学院国際文化研究科を単位取得満期退学した後、平成10年4月より17年3月まで、岩手県立大学盛岡短期大学部に勤務しておりました。現在、大学改革・少子化・過疎化などで高等教育をめぐる環境が大きく変化しております。

1990年代に全国の大学・短大・高校に国際文化学科などが広がっていましたが、「国際文化」というものも、大きな過渡期に入っているように見受けられます。「国際文化」は、資格に直結する分野ではないため、何を特徴として受験生や地域社会にアピールすればいいのか、難しい側面を持っています。「国際文化」は、今後どのような方向性で発展していけばいいのか、短大教育を通じて考えたことを述べたいと思います。

岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科は、平成10年に設置され、他に生活科学科があります。少人数教育を特徴として持ち、岩手県立盛岡短期大学時代を含めれば約50年の歴史があり、地域の評価は高いものがあります。志願倍率も比較的高く、学生の質も決して低くはありません。ただ、平成17年度から独立行政法人となって大きく変わることになり、短大部の将来には不透明なところがあります。

私が短大教員時代に関わった主な学内委員は入試委員、編入学担当、教務委員でしたので、この3つの観点から短大の置かれている状況について、考えていきたいと思います。

第1に入試改革と短大についてです。私が入試委員をしていたときに、作題ミスがあり、そこから入試業務全般の見直しを行うことになりました。入試というものについて、年々社会の見る目が厳しくなっていくことを実感していました。それと同時に、受験者数が年々減る傾向にあり、どうすれば受験生を確保できるのか、大きな問題としてありました。具体的には2つ課題があり、一般選抜と推薦入試の比率をどうするのか、また大学入試センター試験を短大でも導入するべきかどうかです。推薦入試での合格定員を増やせば、一般選抜の受験生が減っても補うことができますが、基礎学力という面からみると、推薦合格者は一般選抜合格者に比べ、レベルが下がる傾向にあります。ただ面白いことに、追跡調査をしてみると、推薦組の方が2年次での就職決定率がいいのです。学力のみならず総合的にレベルの高い学生を集めるために、バランスの良い受験形態が望ましいのですが、現状の一般選抜7、推薦3の比率が理想的のように思えました。また、大学入試センター試験を短大で導入して、受験生が増えるのか減るのかわからず、議論が行き詰まりました。実は短大全体では、センター試験導入推進派が多数だったのですが、それは、短大のような小さい大学では入試科目の出題を担当できる教員が不足しており、作題の都

合からもセンター入試導入が検討されたのでした。結局導入に踏み切りました。

第2に、編入学志向の高まりと国際文化についてです。近年、短大から大学3年次に編入学する学生が増えています。国際文化学科でも、1学年50人のうち平均して15人程度がさまざまな大学に編入していきます。国際文化は語学教育に力を入れているため、編入学試験に合格しやすいのです。国際文化が、短大として今後生き残るためには、大学教育のファーストステージとしての役割を整備する必要があります。ただ、専門性のある教育をしていないため、編入学先で苦労することが多いのも事実です。そのために、短大在学時から4年制大学の科目をいくつか履修できると都合がいいわけで、大学間の単位互換制度の推進が短大として求められました。これは、平成17年度に実現しました。

第3に、カリキュラム改訂問題です。平成16年度から、それまでの英語教育中心のカリキュラムを改訂し、英語科目を整理して、日本語を含めた幅広いコミュニケーション能力の養成、教養教育の充実を図りました。しかし、これは必ずしも成功したとは言えませんでした。国際文化に英語力の向上を求めている学生からは物足りなく写るのです。国際文化は、英語学科とは違いますが、国際文化が学生や地域からもっとも求められているのは、やはり語学力であると感じました。高校・短大など時間の限られた教育機関での国際文化教育の中心は語学教育である必要があり、さらに言えば、コミュニケーションを重視した実践的な語学教育の方が、卒業後の学生の進路に役立っているように思いました。

＜新着情報＞

国際文化研究科の21世紀COEプログラム 「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」活動報告（3）

堀江 薫

（COE拠点リーダー・異文化間教育論講座教授）

本研究科と他研究科の教員が共同で行っている大型研究教育プログラムである東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略的研究教育拠点」（<http://www.lbc21.jp/>）は2002年10月の発足以来、「言語・認知総合科学」新しい学問分野の創成を目指し、言語科学を主軸に据え、脳機能学、認知心理学、文化人類学、音声言語処理、外国語教育学といった学際的諸科学の融合的な研究・教育活動を行ってきました。その成果は、COEホームページで随時公開していますが、「国際学術フォーラム」、「『言語・脳・認知』シンポジウム」、「市民講演会」などの学術的な催事の主催を通して、広く一般に公開しています。このほかにも、関連したさまざまなテーマでの「公開講演会」も、随時開催しており、すでにこの2月で32回を数えました。

また、昨年8月には東北大学100周年記念セミナー「心・言語・脳・電子情報—科学はどこまでヒトに迫ったか—」を東北大学本部および電子情報系COEと共催いたしました。

具体的には、「国際学術フォーラム」は、2003年には第1回「言語・脳・認知科学研究の最前線」、第2回「脳機能画像・失語症・計算論的モデル」（いずれも仙台市）、2004年には第3回「Linguistic Science at Interdisciplinary Crossroads」（英国ケンブリッジ大）、第4回「認知・脳・類型論：融合に向けて」（仙台市）、2005年には第5回「計算機科学と脳科学から見た自然言語：統合的視野を求めて」、第6回「東アジア諸言語の認知心理学：認知研究とその第二言語習得への応用」（いずれも仙台市）というテーマで6回行ってきました。また、本年3月には日本女子大学との共催で第7回「文化を基盤として認知・言語を再考する」を日本女子大学目白キャンパスで開催します。これらは、いずれもその分野での世界水準の研究レベルを念頭に国際的な研究者の国際会議であります。

より専門的な内容で他大学の研究者を招いて行う『言語・脳・認知』シンポジウムを昨年からはじめ、日本音響学会東北支部との共催の第1回『音声・言語・脳』：統合的理解を求めて—物理科学、脳科学、認知科学からのアプローチ—（2005年9月）、および、国立七大学の外国語教育関連科学研究費グループとメディア教育開発センターの共催・後援になる第2回「第二言語習得研究とコンピュータ支援外国語教育」（2006年1月）にも、全国から多くの参加がありました。

国際フォーラム、シンポジウムはいずれも、本COEが目指している言語科学、認知科学、脳科学とその周辺領域である言語教育学、言語文化科学などの統合を目指した言語認知総合科学分野の創成を志向しています。

「市民講演会」は、拠点の活動を分かりやすく市民の方々に公開する目的で市民講演会を第1回「脳・こころ・ことばを探究する」（2004年12月）、第2回「脳を鍛える、知能を測る：脳科学と人文科学からの問いかけ」（2005年5月）というテーマで行い、多くの市民の方々に参加いただきました。



「計算機科学と脳科学から見た自然言語：統合的視野を求めて」

（2005年10月の第5回COE国際学術フォーラム）

これらの活動に勝るとも劣らず重要なのは、本研究科の博士課程院生の中から、言語科学と脳機能学を融合させた言語・認

知総合科学の分野での研究に積極的に取り組む学生が出てきたことです。すでに同分野で博士論文を書き上げて研究員となっている本研究科卒業生や、COEのリサーチアシスタントを経て博士号を取得し、大学の専任職を得た卒業生もいます。同分野で国際的に著名な学術誌に論文を採択される博士課程院生も出てきました。本拠点の研究教育活動は、2007年3月をもって一つの区切りを迎えますが、本拠点の研究教育活動を通じて確立を目指している「言語・認知総合科学」分野への研究・教育への取り組みをぜひ継続していきたいと考えております。当拠点のホームページをご覧ください、同窓会の皆様にもぜひ当拠点の公開行事に参加していただければと願っております。

＜会報講座＞

第12回国際文化基礎講座の概要

第12回国際文化基礎講座（平成17年度）では、本研究科の新進気鋭の研究者が歴史の中で活躍した3人—ナポレオン・魯迅・ベルクソン—の人的魅力を徹底分析し、受講生に「より良く生きるヒント」を提供されました。以下にその概要をご紹介します。

（1）ナポレオンの「生きざま」

—どん底からの復活劇を読みとく—

野村 啓介

（ヨーロッパ文化論講座助教授）

公開講座の初回（11月19日）を飾らせていただきました。実をいえば、この講義は私の30代最後の大仕事でした。そして、最終日のラウンドテーブル（12月3日）は40代最初の仕事に。つまり、誕生日を挟んで公開講座に臨んだというわけでした。まさに公開講座は私の人生の節目でした。その意味でもこのたびの公開講座は、私自身の大学人としての「生きざま」にとって大変に意義深いものとなりました。ここであらためて、関係各位のみなさまに感謝の意を表するしだいです。

さて、講義では受講者のみなさんの真剣なまなざしをつねに感じながら、緊張のうちに2時間の講義がおわりました。ここでもうひとつ秘密を明かしますと、現在の私はナポレオン関係の研究から少しだけ離れており、この数年のあいだ、大学院時代に留学していたフランス南西部の港町ボルドーの歴史を勉強することに比重が移っています。そんなわけでしたので、講義の準備過程は遠い記憶を呼び起こすとともに、過去の自分の仕事を客観的に批評するよい機会となりました。

講義の目標は、ナポレオン1世とナポレオン3世（ルイ＝ナポレオン）という両ナポレオンの「生きざま」をつうじて、そこから現代のわれわれが生きるうえで参考になりそうな何かをつかみとろうということでした。準備段階では、どちらかというと、わが国ではあまり知られていないナポレオン3世のほうに

やや重きをおこうと計画していました。なにしろナポレオン1世については、わが国でも多くの書籍が出版されていますし、関連の美術展などもよく開催されています。しかし準備がすすむにつれて、ナポレオン1世のほう聞き手にとってはおもしろいのではないかという考えが少しずつ比重を増していきました。結果的に、時間的にも内容的にもナポレオン1世に少し偏ってしまったように感じます（実際、受講生の方からもそのように指摘されました…）。その点が反省点といえばそうなのですが、それでもやはり少なからずナポレオン3世のほうにも言及できたことは、学問の社会的還元という意味では有意義だったと考えています。

私は二人のナポレオンに着目するにあたり、「生きざま」がより明瞭に浮かびあがってくるであろうと考えられる、どん底からの復活という局面に重心をおきました。つまり、ナポレオン1世についてはエルバ島からの帰還(百日天下)に、ナポレオン3世については不遇の亡命時代からの台頭に注目し、二人の「生きざま」を追っていきました。一般的にいつて、どん底からの復活というものは、かなり大きなエネルギーを必要とするものでしょう。そこには運命のいたずらという、一言で片づける要因も多分に作用していることではありますが、私は何よりも個人が発揮するエネルギーに注目したいと思いました。もちろん、人生の意味づけなどというものは人によって多種多様ですから、私の講義がどれほどまで受講生を満足させることができたのかわかりません。ましてや、約2時間という短い時間で、二人のナポレオンについて語るなどという「暴挙」をおかしてしまいましたから、なおさらのことです。とはいえ、講義後に受講生の方々から少なからぬ好意的なコメントをいただいたことに、ほっと胸をなでおろしています。

公開講座をつうじて一般市民の方々に講義するというのは、大変に貴重な経験となりました。熱心に聴講くださったみなさまにもまた、心より感謝申しあげます。このたびの経験を、今後の大学生活への糧にしたいと考えています。

（2）鲁迅の「生きざま」

—命を捨てても譲れないもの—

勝山 稔

（アジア文化論講座助教授）

鲁迅（ろじん）は本名を周樹人と言い、西洋医学により中国人を救おうと1904年9月仙台医学専門学校（東北大学医学部の前身）に入学したが、「中国人の精神を改造するには文学が必要」と決意し、1918年4月雑誌『新青年』に「狂人日記」を発表し痛烈な儒教批判の内容と共に当時の文学界に衝撃を与えた「中国の文豪」もしくは「中国の最も偉大な革命家」である。

以上は我々が事典や概説書で知りうる鲁迅像であるが、これ

らの説明に見える鲁迅像は、現在我々の時代や立場から見た鲁迅であり、ある意味「結果」から見える鲁迅の一面に過ぎない。たとえ彼が後に「偉大な中国近代文学の父」と称されたとしても、鲁迅が生きていた時には、一つの生身の人間として多くの挫折を経験し苦悩と煩悶を繰り返しているのである。

鲁迅の幼年時代は苦難の連続だった。裕福な役人の家に生まれた鲁迅であったが、祖父の収賄事件での逮捕、父の病死により貧窮の毎日を送った。その後鲁迅は18歳の時に南京に転居し江南陸師学堂付属鉱務鉄道学堂へ入学し新しい学問と知識を身に付け、古い漢方医学の誤診で命を失った父を思い、先進の西洋医学を学ぶために鲁迅は日本に留学し仙台の医学専門学校に入学した。

初めて会った様々な先生の中で、特に印象的だったのが解剖学の藤野先生だった。藤野先生は鲁迅の講義ノートに朱筆で丁寧に添削してくれたほか、下宿の幹旋など鲁迅の事を思い様々な気遣いを見せた。鲁迅にとって藤野先生の印象は、仙台を去ってからも、中国に戻ってからも消えることはなく、鲁迅は仙台を去り帰国した後も、藤野先生を忘れず、師として敬愛の念を捧げた。その後「私は寧ろ中国人全体の精神を治さねばならない」と医学から文学へと転向した鲁迅は東京生活を経て帰国、辛亥革命とその挫折を経験する中で鲁迅はひどく幻滅し、古碑拓本の収集や古書の校勘などに没頭することとなった。

その彼に転機が訪れたのが友人の紹介で雑誌『新青年』に発表した小説「狂人日記」である。「狂人日記」は作品のほぼ全部が当時の口語（話し言葉）で書かれ、封建的家族制度や儒教的思想がいかに人間らしさを奪っているかを指摘した点で大変な反響を呼び、文学革命が目指す中国新文学の筆頭に挙げられるようになった。

ただその後の人生はまさに「茨の道」となった。まず弟・周作人との確執や、その後の3・18事件では鲁迅の教え子が惨殺され、鲁迅自身も暴動の扇動者と指摘された。その後彼は廈門を経て広州に逃れたが、広州では蒋介石による共産党弾圧により更に多くの学生が虐殺された。これにより鲁迅は決意を固め外国租界のある上海に活動拠点を移し時の政府や反動的な文人に対して痛烈な批判を行った。上海事変以後はますます言論弾圧が厳しくなり、反政府的な言論を行うものは襲撃・破壊を受け、時には暗殺されることも多くなった。そのため鲁迅は身の安全のために匿名や偽名で寄稿したが、それでも筆跡でばれてしまうため、投稿するときには夫人が原稿を転写して提出するほどだった。それでも革命文学に関する論争や国民党による弾圧にも屈せず、中国左翼作家連盟に参加するなど新しい中国の誕生のために積極的な文筆活動を行った。結局鲁迅は志半ばに病魔に冒されて他界したが、彼の祖国に対する情熱は文字通り「命を捨てても譲れない」ものとして後世の人々に多大な影響を与えたのである。

(3) 哲学者ベルクソンの〈生きざま〉 —考えることと生きること—

佐藤 透

(ヨーロッパ文化論講座助教授)

現代哲学の中には、人の“生きざま”と直結しない哲学的営みもあるが、「生の哲学」とか「実存主義・実存哲学」と呼ばれる哲学潮流は、とりわけ人の“生きざま”と深く関わっており、今回この講演で取り上げたフランスの哲学者アンリ・ベルクソンも生の哲学の潮流と近い関係にあった。

ベルクソンが生まれたのは1859年で、日本では尊皇攘夷運動に対する幕府の弾圧が強まり、いわゆる安政の大獄で吉田松陰が処刑された年だった。ヨーロッパで第二次世界大戦が始まって一年半ほどを経過した1941年、ドイツ占領下のパリで、彼は81年と少しの生涯を閉じる。1928年にノーベル文学賞を受賞する以前から世界的名声を得ていた彼は、第一次世界大戦中にフランス政府から外交使節としてアメリカやスペインに派遣されたり、戦後、国際連盟の諮問機関として設立された「国際知的協力委員会」の議長を務めたりと、政治的・社会的な活動も行っているが、哲学者ベルクソンの生涯にとってはそうした活動はいわば枝葉に過ぎない。彼自身そう考えていたように、哲学者の活動の幹は〈考えること〉であり、哲学者の生涯はその思想と一つだとも言える。哲学者でなくとも人生に悩みは付きもので、悩み考えることは他の動物と異なる人間の特徴でもある。ただ、哲学者たちは物事を根本から徹底的に考えるから、彼らの生き方には〈考えること〉と〈生きること〉との関係が拡大されて示されているとも言えるだろう。

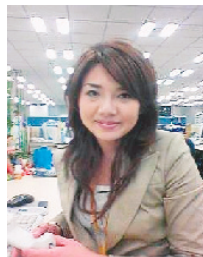
哲学者たちは歴史上の英雄のように巨大な建築物を築いたり、自分の像を残したりはしない。彼らが後世に残すのは哲学であり思想である。だから、生前にまとまった形で著作として発表しなかったものでも、遺稿という形でそれを後世に伝える人も多い。たとえば、ベルクソンと同年にドイツで生まれたエドムント・フッサール（現象学の創始者）には膨大な遺稿があり、それは今日なお整理、出版され続けている。ところが、ベルクソンは、自分の遺稿や手紙を後から出版することを遺言で厳禁しているのである。これは何故だろうか。思想家として遺稿の出版を禁ずるという彼の“生きざま”には、彼の哲学が深く関わっていると考えた方がよい。彼の哲学は、その出発点から「時間」を巡る考察に導かれていたが、彼の時間論が、この一見ささいな出来事の裏側で、彼の決断を支えていると思われる。それでは彼の哲学とはどのようなものだったのか、この講演ではベルクソンの時間論を平易な比喻で解説しながら、世阿弥や芭蕉といった東洋の思索とも重ね合わせつつ、現代人の時間観と生き方がそこから何を学べるかについて参加者とともに考えた。

<就職後の近況報告>

企業への就職を希望される皆様へ

柴田 夕菜

(言語生成論講座前期課程修了生)



私は昨年（平成17年）の春にソフトバンクBB株式会社に就職し、弊社流通事業本部・法人営業担当者として、様々な企業様とお取引をさせていただいております。1年近く経つ今も、一日一日が驚くほど違う毎日で飽きることがありません。今回は民間企業に就職した一人として、主に在学生の皆様へ、弊社に就職するまでのことや自分が現在感じていることをお話させていただきたいと思います。

私が就職活動を始めたのはM1の冬でした。就職雑誌を買い、就職サイトを開き、何となく名前と在学大学を入れてみました。本格的に企業へ足を運んだのは2月頃だったと思います。現在の新卒採用のスケジュールとしては若干遅めだったようです。

当時、「勝利の鍵は情報収集!」「志望企業の徹底研究!」という言葉を目にしては心からうんざりしていました。企業のHPへアクセスし、社史・事業内容・社長の顔写真などを眺めます。どの企業もすでに社会に貢献しグローバルなプロジェクトを成功させており、論文準備もままならない当時の私に、「ここでどんな毎日を送るのか」「会社へどう貢献できるのか」などイメージできるはずがありませんでした。企業に採用していただくには、人事担当者に短い時間で自分の強みをアピールし、「これから現場で働く自分」の絵をイメージさせなければならなかったのに、私の採用過程（就活）における最大の反省点は「強み」というものを見出せなかったことです。

現在就職をお考えの皆さんは、国際文化研究科で過ごした私達が、どれほどの強みを持っているかご存知でしょうか。今になって考えてみると、会社には本当に多様な人間がおり、彼らと接して初めてわかった自分の「強み」というものがたくさんあります。例えば、一つの課題についてじっくり調べるという経験をしたことがある、人に納得してもらうにはエビデンスが有効である（必要である）ことを知っている、趣味ではとても読めない長い論文を、一つでも読破した経験がある、課題提出に必死になり大学で朝を迎えたことがある、etc。

お客様と接していると、頭が真っ白になるほど「全くわからない」質問をされることがあります。それでも、お客様に説明できるところまで研究し、資料を準備できた時には、学生時代の興奮が蘇りました。

何度も失敗しながら体で教わったことですが、私が特に意識するように心がけていることは、「自分に何を期待されているのか理解すること」、「自分はどうしたいのかを自覚し明確な目的意識をベースに行動すること」です。

今思うと、私が所属した講座・支援を受けた講座にはこれらを当たり前でできる方が多かったようです。ゼミ発表が迫ってくると必ず同僚や先輩が助けて下さいました。その支援の様子が、あたかも「自分のことのように」自然だったことが大変印象的です。また修士論文の提出前夜も壮絶でした。研究室に行くとM1やDCの方が揃って待機しています。そして、前から決まっていたかのように、先輩方は赤ペンを持って内容を読んで下さり、OKが出ると一斉に印刷・製本・最終点検が始まりました。予想外のスムーズさに、私の方が呆然としたくらいでした。

国際文化研究科の伝統か、あるいは留学生の方々から日本へ持ち込んでくれた素晴らしい文化か、私はこんな温かい世界を知りませんでした。この文化を今度は私が引き継ぎ、職場や社会に伝えていきたいと強く思っています。

国際文化研究科で学ばれる日本人学生の皆さんは、母国にいながらにして広い世界を体験しながら過ごせたという喜びを、また留学生の方々は、多くのハードルを乗り越えた強さ、生まれながらに持つ国民性という個性を最大の誇りと強みにしていただきたいと思います。それら全てが、皆さんが社会に貢献できる十分な要素であると確信しております。

数年先の夢を語るとき、お客様に「任せてください！」と断言するとき、口から出る言葉が人より少し大きく、大胆である気がします。同僚につられて遅くまで職場に残ってしまうことがあります。そんな自分を感じたときは気持ちがよく、学生時代を懐かしく思っています。これから就職される皆さん、国際文化研究科の研究環境と経験を武器に、人事部さんの期待、上司の期待、社会の期待に存分にお応えください。

＜国際賞受賞報告＞

大竹 壘

(異文化間教育論講座後期課程 1 年)

2005 年 12 月 1～3 日に台北 (台湾) Academia Sinica で開催された第 19 回言語・情報・計算アジア太平洋会議(The 19th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation: PACLIC 19)において本研究科異文化間教育論講座博士課程 1 年大竹壘氏 (指導教員・吉本啓教授) の論文 Multiply Quantified Internally Headed Relative Clause in Japanese: A Skolem Term Based Approach (日本語の多重量化主要部内在型関係節: スコーレム項に基づく

く分析) が First Runner-up for Young Scholar Award を受賞されました。

この論文は、例えば「太郎は花子が林檎をむいてくれたのを食べた」のような日本語の主要部内在型関係節と呼ばれる構文を自然言語の形式意味論の立場から扱い、特に主節から多重量化を受けた場合の関係節の意味解釈に注目し、論理形式におけるスコーレム項という特別な個体定項の導入によって主要部内在型関係節の意味タイプが常に個体として分析できることを示したものです。

今回の受賞は氏のこれまでの地道な研究が海外の国際学会での栄えある受賞という形で結実したものであり、同窓会としても心よりお祝いし、喜びを分かち合いたいと思います。大竹氏にはこの受賞を契機にますます研鑽を積み重ねさらに大輪の花を咲かせていただくことを期待したいと思います。また、本研究科の他の学生諸君も、この受賞熟を刺激としてさらに輝かしい成果を収められることを期待しています。

(文責・編集委員)

事務局からの連絡

①メールマガジン・メールアドレスについて

事務局では現在メールマガジンの発行を検討中です。ついでには、メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科に係る連絡のみに使用します。国際文化研究科教務係 <int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp>

②会費・寄付金の納入のお願い

会則第 11 条第 1 項及び 12 条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○平成 17 年 4 月入学、進学及び編入学者で未納の方

- (1) 国際文化研究科前期課程の学生: 4,000 円
- (2) 国際文化研究科後期課程の学生: 6,000 円

○上記以外の方 (修了生、在学生、現教職員・元教職員等) にはご寄付という形でご支援をお願いできますと幸いです。 1 口 2,000 円 (何口でも結構です)

会費・寄付金とも最寄りの郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にて直接お納め下さるようお願いいたします。

郵便振替口座名称: 国際文化研究科同窓会
郵便振替口座番号: 02220-5-66621

③ご意見・ご提案等を!

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら、事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたら、異動通知連絡カード等によりご連絡願います。お寄せいただいた個人情報 は厳密に管理し、同窓会・研究科に係る連絡のみに使用します。